

特 100

37



始



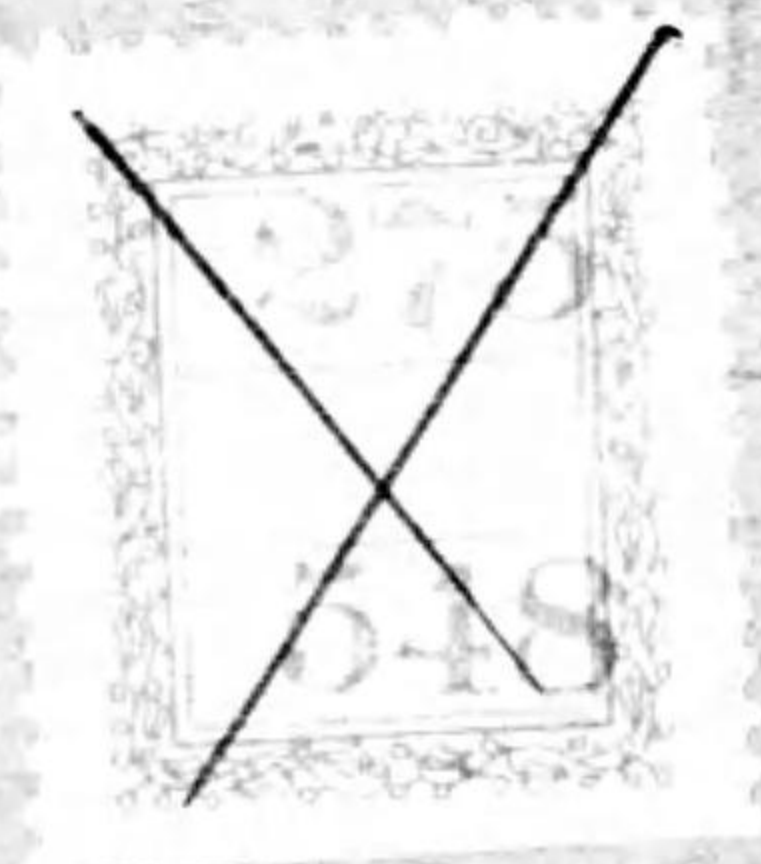
特 100

37

米期  
**三虎錄**  
全

發行所

急電社



# 期米三虎録目次

緒言

前編

第一章	正米より見たる十二月米	一
第二章	臺鮮米より見たる十二月米	五
第三章	金融農家事情等より見たる十二月米	七
第四章	一般人氣より見たる十二月米	八
第五章	大手筋の態度より見たる十二月米	十
第六章	結論	十五

後編

毎日高低豫言	(自十一月廿四日)	一
	(至十二月廿六日)	十八

丁丁丁正  
2. 11. 29  
内交

特100  
37

# 期米三虎録

九眼道人述

緒言

本書は此十一月下旬より来る十二月納會迄に於ける期米の高低變動につき、前編は之を強弱材料の上よりして大勢觀を下し、後篇は既往百八十年間の曆數的實驗秘卷に基きて毎日高低を豫斷したるものなり

## 前編 大勢觀

### 第一章 正米より見たる十二月米

正米には上中下の區別あり、又川尻米もあれば越後米もあれば其他種々ありて

- 急電社規則摘要.....廿八丁
- 急電社の成績.....三十丁
- 豫言通信社の選擇.....卅一丁
- 無料打電に就て御心得.....卅二丁

其價格は區々たりと雖も、東京米商取引所の定期標準建たる武藏中米の相場は時に依て異なるも、昨今の相場はザツと一石二十一圓内外と見ば可ならん。夫れ正米は一石廿一圓なれ共、定期は十九圓三十錢（此稿執筆當時の相場にて云ふ）の安値なり、故に此點より見る時は定期は買の外、途あるべからず。此事たるや頗る平凡の議論なれども、相場は矢張り實業の一種にして、定期は得て正米に左右せらるゝを思へば、決して平凡の議論として度外視すべからず。本年八月一日の發會には定期が十八圓六十三錢に産まれて、トン／＼拍子に暴落して、八月六日には十七圓飛五錢の安値を出せり。人氣は先安見越して總賣りの体なりき。然れども當時正米は依然として廿圓以上の價格を保ち居たり、正米は廿圓以上の相場を保ちつゝあるにも拘はらず、期米は十七圓と云ふ桁外づれの安値となれり。正米より三圓以上も下鞘を叩ける定期に何を以てか渡米する者あらん、果然として八月中は頃より下旬に懸けて、志ある大手筋は陰かに買に廻はり、賣方も漸次に踏退くと云ふ有様にて遂に暴騰の端緒を起せり。

是れ皆正米との權衡を失し、正米との採算を無視し、相場を實業の一種と心得ずして、賭博的に心得たる罪なり。無意味に賣過ぎたる反動なり、勿論其後の暴騰は夏以來天候の不順なりしには依ると雖も、半ばは賣過ぎの反動なり。而して十七圓飛五錢にて一度び底入れとなりて暴騰の端緒を開くや、定期は正米に附隨して先月下旬は廿圓七十一錢の高値に進めり、勿論諸種の原因ありたれども一つは正米不引合の聲に驅られて奔騰したるなり。是れ素より當然、正米より觀たる定期は斯く有るべき筈のものなり。

先月下旬相場が一度廿圓七十一錢の新高値を出すや、從來不引合なりし臺鮮米も、漸く之を定期に懸け繋ぎて引合ふに至り、又た地方の割安物を拾ひ集むる時は、そろ／＼定期に懸け繋ぐも引合ふに至りたり。從來不引合の聲に驅られて暴騰したるものとせば、其引合ふに至りたる以上は、陰陽の換轉時期と思はざるべからず、從來不引合の正米が追々引合ふに至りたる事情より一般の人氣と云ひ、其他各種の事情と云ひ、廿圓七十一錢は陽の極にして、買方の時代は

一先づ去りたる兆候歴然たりき。當時道人は數々之を絶叫したりしが、果然として相場は急轉直下の勢を以て暴落せり。何と言つても定期戦に於ける最後の決勝點は、正米を渡すか受けるかと云ふに在つて存すれば、正米事情は決して之を度外に付し去るべからず。而して今より來る十二月末迄の正米事情は果して如何と云ふに、道人は大體に於て現今の價格即ち廿一圓前後の相場を維持すべき者と信ず。見よ定期は一時の高値より中限は約一圓七十錢方も暴落したるに拘はらず、正米は僅々三五十錢方も下押し、たるに過ぎざるのみならず、而かも安値は賣物乏しきに非らずや、是れ其れ丈け正米其物に強き處あるが爲めなりとす。故に正米は一時二三十錢位の變動は別問題として、大體に於て今後決して暴落するとなかるべし。然り果して然りとせば正米より見たる十二月米は押目買の方針を取らざるべからず。

## 第二章 臺鮮米より觀たる十二月米

昨今定期が正米よりも遙かに下鞆を叩ける一つの原因は臺鮮米の代用制あるが爲めなり。臺鮮米は品質粗惡にして日本人の口舌に適せず、従つて其捌き口に困難なり。定期の買方も内地米なら受けても結構なれ共、捌き口に困難なる臺鮮米を受くべきと云へば、多少ヘコタレざるべからず。賣方は此武器を擁して賣叩き、買方は躊躇すると云ふ事なれば、斯くは大なる下鞆を叩けるなり。然れども見よ本年は東北は大なる凶作なり、日本全國を通ずるも先づ四千八九百萬石とすれば漸く平年作なり。人口は年々増殖するの有様なれば、發展せる此大正二年度の産米が漸く平作とありては心細き次第なり、臺灣米可なり、朝鮮米可なり、外米亦た可なりと云はざるべからず、分けても東北地方は大凶作なれば、臺灣米は此方にも大に捌け口の良き有様なり、臺鮮米の捌き方決して案ずる必要なし。定期の買方が賣方より臺鮮米の二萬や三萬受取りたりとて左まで苦痛を感ずべきに非らず。而して臺鮮米は實際に於て格落ち不定なれども先づ之れを格落ち四圓五十錢と見積る時は十九圓三十錢の定期に對して一石十

四圓八十錢となるべし。臺灣米は昨今相場聊か緩みたりと雖も數萬石と纏まりて一石十五圓以下にて買入る事は不能なるべし、之れに諸入費などを合せる時は先づ一石十六圓内外の見當ならざれば、買入れ能はざるべし。其れも大石數は値段のみ走りて容易の業に非らず、之を一石十六圓にて買入れ得るとして、格落ち四圓五十錢即ち二十圓五十錢の定期に漸く一パイなり。十九圓三十錢の定期に繋ぐには一圓以上の減利を來すべし。賣方とて一時は駆引として少石數は多少の減利を忍んで渡すとあらんも、決して大石數を渡し得べからず、若し買方に於て一二萬石づゝでも臺灣米をセメテ二回も受けたらんには、賣方は遂に渡米に窮するに至るべし。故に臺灣米代用の爲めに一圓七八十錢も下鞘を叩けるは昨今の事情より見て賣方の腕力賣りと云ふへし、同鞘も不可なれど一圓内外の下鞘が至當なるべし。賣過ぎの祟りは懸がて到來せん、昨今の如き大下鞘は賣方の歩甚だ悪きものなり。

### 第三章 金融農家事情等より見たる十二月米

金融は逼迫なり、歳末に金融の繁忙を告ぐるは、毎年の例なり。納税期も迫まり且つ諸種の費用をも要し、商人と言はず、農家と云はず、一般に資金の必要を感じる時なれば、持米筋は必ず多少賣出し來るべきとは疑を容れず、爲めに一時相場が多少下押すとあらん。然れども農家は前年の高値を能く覺へ居るとなれば唯だ急に迫まれる小農を除けば、決して安値に賣出し來るが如きとは萬々之れなきなり、殊に東北の如き凶作地は絶對に斯る事なかるべきなり。而して本年は商人も所持米少なき故、農家及商人の賣崩つしは決して心配すべからず年末は突然に來るものに非らず、漸次に日數を経て初めて來るものなれば、志ある農家及商人は必ず夙に用意しあるべし、必ずしも歳末の金融を憂ふべからず、但し歳末は銀行も資金繁忙なれば、買方に受米資金を融通するを例月の通りには行かざるべし、爲めに十二月は市場は買方の受米資金を氣遣ひ妄りに

悲觀説を流布して軟派の突買賣りを見るを珍しからず、昨年十二月廿三圓飛六錢より廿一圓臺にまで一直線の大暴落を來したるは、色々の事情もあれど、一つは之れが爲めなり、昨年例に懲りても本年は買方が如此手拵なりはせざるべし、従つて昨年例を以て本年を斷すべからず

八

#### 第四章 一般人氣より見たる十二月米

素人筋は先月の二十圓三五十錢堀みは總買の体なりき。相場が躍進して二十圓六七十錢となるや、利乗せに猫も杓子も總買の有様なりき。處が左様にウマクは問屋で卸さず、急轉直下の大暴落となれり。而して證據金は一旦は飛はしても、飛ばしては買ひ、飛ばしては復た買直ほすと云ふのが、昨今一般マバラ筋の人氣なり。即ち來客筋は十人が九人迄は買持ちなり。地場連は飽迄下堀ほりに賛成なれども、四圍の材料は尙ほ此上に急激の暴落を許さざるを以て、妄りに安値賣崩づしも出來ず、去りて暴騰せば來客筋に喰はるゝに至るべし。依

て地場連は此處餘り上へも下へも遣らず、當分保合相場を繰返へして、幾度もイヤな味を見せ、客筋の買氣を殺いて、賣人氣となりたる頃に、煽り上げんと陰かに時機を窺ひ居れるの有様なり。地場連の野心も餘りウマ過ぎて、覺束ないやうではあるが、此十二月は地場が何うしても餅搗き相場をせざれば、年が取れぬと云ふ騒ぎなる故、餘り地場連を馬鹿にするも得策に非らざるべし。纏つて來客筋今後の態度は如何と云ふに、成程一般地場連の期するが如く、相場が這んな處で保合ひて度々イヤな味を見せられる時は、來客筋の買氣は、過半一變してツロく買玉を外づし戻り賣り方針に出掛けるやも知れず、相場が今度九圓七八十錢乃至二十圓臺にでも、乗つたら、安値覺へで定めし賣來るとならん、左様になると地場連は今度は躍起になつて煽り付くるに至らん。客筋なるものは誠に地場連にはウマク子供の如くに扱はれ居るなり、高い處を買へば叩かれ、安い處を賣れば煽はられ、實に傍らにて見る眼も氣の毒位なり。本書の讀者は幸に大勢に乗つて敢て輕舉盲動せざらんを望むなり。

九



## 第五章 大手筋の態度より見たる十二月

澤田は軟派の第一人者なり、全体澤田と云ふ人間は、理が非でも方針を通すと云ふ遣り口なれば、勿論今後も軟派として活動すべきとは疑なきも、併し今は大分資力潤れて陣頭馬を進めて奮戦するの勇なし。

萩長は現今は軟派として第一の大手なり。彼れは臺鮮米及内地米を加ふる時は其正米所持高二萬石内外を占むるならん、萩長の向背如何は直ちに相場に少なからざる影響を與ふべし。若し相場が此儘暴騰するが如きとある時は、彼れは飽く迄賣抑への方針を取るべきも、併し安値は買意あるは争ふべからず。彼れは未だドテン硬化と迄には至らざれども、其大なる賣玉は餘程利喰したる處を見れば、相場が更らに一段の安値を現はす時は、ドテン硬化すべき人物なり濱野小暮は例に依て強氣なり、下地は買拾ふべし

伊藤延は今は弱氣なれども、目先き師なれば餘り當てにならず、安値には硬化せん。高居も根は強氣なれども、時期尙早とや思ひけん、今は餘り氣乗らず、然れども今後は硬派として活動するの人なるべし。熊倉はハヤ内々買玉を拵へつゝあり、安値は益す買腰を堅め、硬派の陣頭に躍進するを疑なし。

岡田は大なる強氣なり、彼れが現今有する買玉は約六七萬石に上ぼりしなるべし。市場は岡田等を満腹と見て、同人を悲觀し、相場を叩き崩す時は、其買玉を維持する能はずして投げ退き來るべしと盛んに見越して、飽迄追撃の手を緩めざらんとしつゝあれども、同氏の態度は牢として抜くべからず。彼れの資産は如何と云ふに、或は三十萬圓、或は二十萬圓と云ふ者あれども、二十萬圓位のものなるべし。而して彼れの買玉を仕込める平均中値は二十圓二三錢見當と見れば、大丈夫なり、今は引かれて平均一圓、之を七萬石の買玉とするも尙ほ七萬圓の損失に過ぎず、二十萬圓の資産を以て、七萬圓の打撃を被りたりとて、彼れは必ずしも買玉の維持困難を訴ふるの筈なし。且つ彼れは仲買店を

營み客にも買はれあるとなれば、此七萬圓の半ば位は客筋の負擔とならん。斯く觀し來れば、尙ほ此上一圓切り位の下落には、決して困難せざる筈なり。然るを同氏等を悲觀して其投退きを期待するが如きは、餘りに姑息にして、是れ大勢を賣買するに非らずして、人を賣買する者なれば、遠からずして其崇りは反動となりて現はれざるべからず。

軟派が人力を以て腮刺的に相場を崩さば下値には右に擧げたる強氣の面々は、云ふに及ばず、正米筋も有力筋も各地の大手も、好期至れりとして、共に大に買出でんは必定なり。

軟派一般の眞意は尙ほ一段相場を叩き崩して投物を呼起し、其れに向つて下地に於て大に旗入れ、アハ好くばドテン買越さんとするの策戦なり、今は硬軍の陣營は四面楚歌にして振はざれども、軟軍には油の乗り居る時なれば、相場は動もすれば、軟派に蹂躪せらるゝの傾きあり。乍併陰陽循環して已まざるを以て相場の理法なりとすれば、今日の勝利軍たる軟派は、其れ後日の敗軍者に

非らざるなきを得んや。

且つ右に述べたる如く、未來の軟派大手として活動すべき人物は、甚だ微々寥々たれども、硬派として活動すべき面々は甚だ多し。然らば仕手の關係よりするも前途の暴騰を豫期せざるべからず。

軟派の第一人者たる萩長等の如き、先頃の高値時代に在ては、其自己の持米を定期の渡米に供すべきを標榜して、賣叩き來りたるに爾後相場は暴露して大安値を現はすに至りたるを以て、追々利喰買戻しの態度を執れるが如き、以て斯る安値には一般軟派と雖も、渡米を避けつゝあるの事實を證するに足る。

又た硬派と雖も、素より受米を希望するに非らざるも、昨今の如き暴落に際會しては、逃げを張る譯にも行かず、いやでも應でも自衛的に受米の臍を堅めざるべからず、即ち窮鼠猫を噛むの類なり。此頃強氣たる越後の今善や其他有力の地方筋も上京して、東京の岡田小暮等強氣の面々と、私かに會合して秘密の策戦を回らしたり。其會合が果して如何なる謀議策戦を爲したるか云ふに、

是れ言ふ迄もなく、互に買玉を維持し、受米資金に就ても、銀行の斡旋其他に就き、互に應援し、且つ新規の買方をも味方に引入れん等の策戦なりしは疑ふべくも非らず。相場は理法は兎角初めに惱まされたる者は終りに起き上がるものなり。勝者は勝ちに乗ずるを以て轉じて敗者となり、敗者は最後の智慧と腕力とを絞ほりて背水の陣を以て戦ふが故に轉じて勝者となる。現今の買方の内幕策戦は徐々に最後の智慧と腕力とを絞らんとしつゝあり。唯だ買方の中心たる岡田小暮の一派が深謀遠慮の勇將に非らず、一時の成金として聊か輕躁に傾ける人物の感あるは、買方の爲め遺憾とする處あれども、併し買方一派も今回は餘程魂膽を碎きて、熟慮に熟慮を重ね、計劃に計劃を回らし居るのみならず追々新規の大手も買方軍に馳せ參するの兆候あれば、舉ちに見縊るは策の得たるものに非らず、且つ賣方は既に全力を擧げて相場を叩き崩せる傾きあれば、何れは其虛に乗せらるゝ時あるは必然なるべし。要するに仕手の關係より見る時は昨今恰かも押目買の時期なり。先づ上下の波

瀾を繰返へしたる後は結局反動高あるべし。

## 第六章 結 論

相場は大体に於て既に底入れたるものと云はざるべからず、人力作用にて若しも更らに新安値を現はすが如きとあるも、下値は決して深からざるべし。今一段崩づれて十八圓五七十錢ともならば、一般に手透きの面々は、大ひに買渡ひ呉れんものとして待ち構へ居るものゝ如し。相場は決して人の期待するが如き値頃に達せずして陰陽の轉換するを其の原理と爲す。先月廿圓七十一錢の高値を出せる時も、一般の人氣は廿一圓二三十錢、搦みまで擔ぎ行かば大に賣らんとするに在りき。甲も乙も丙も猫も杓子も皆二十一圓二三十錢處を待つて賣らんとしつゝありたるが、相場は皮肉にも七十一錢を頭として遂に挫折したりき若し相場が一般の待ち構へつゝある値頃に達せざるものとすれば、今や一般手透きの面々の期待せる十八圓五七十錢は、チト六ヶ敷きものと云はざるべからず。相場

は得て皮肉なり、皮肉に解釋すべし。然り十八圓五七十錢は出現せざるものとせば、過般の安値は先づ大体に於て底と張るも大過なかるべし。即ち相場は萬人の待ち構へつゝある安値に達せず、又た假りに達すとすも、一般有力筋の買狙ひに依て相場は却て一層の反撥力を以て暴騰するとなるべし。

且つ此米は過ぐる八月の十七圓飛五錢より先月の廿圓七十一錢即ち四ヶ月間かゝりて三圓六十六錢方の暴騰なり。先づザツト二割上げなり、而して今回の暴落は約一割下げなり、昨今の出來秋に於て二割上げに對する一割下げは、決して相場其れ自身の強味を失はず、此位の事は相場の率として當然なり、之を強き米と解釋すれば、此押目を出したる丈け、却て前途の反撥力を増大せしめたるとなるべし。

且つ其上げ月を見るに、其暴騰は八月九月十月十一月の四ヶ月間に亘れり、此四ヶ月間順序的に騰貴の步調を辿りたり。下落は僅か一二週間なり。相場の原理より云ふ時は、四ヶ月間も毎月ヒシ／＼と上げ行きたる相場が、短時日にし

て急落する場合には買建つべきものなり。假りに前途は更らに新安値を出すもあるにもせよ、一旦は先きの値頃に迄戻るものなり。

昨年は九月より引續きて十二月迄上げ詰めて遂に二十三圓飛六錢の高値を出したり之れが數日間にして約二圓切りの大暴落を爲したれども、更らに再び三圓十六錢の高値を現はせり。昨今の如く急落せる米は、必ず跳返すものなり。其急落の激甚なるに狼狽して投げ退くが如きは相場を知らざるもの、爲す處なり此法より云へば最早相場がソロ／＼跳返へすべき順序なれ共、前述の如く來客總買なるに加へて買方悲觀の念慮も高まり居れるのみならず、昨年末金融逼迫の爲め大暴落せし前年の例等にも懲りて今は一氣呵成に跳返へすの力なしと雖も、蓋し潜勢力を養ひつゝあるものと見るべし。故に此米は押目買の方針を可とすべし。

然れども相場が此儘立直ほりて暴騰するが如きとある時は軟派も飽迄賣浴せるべく、且つ種々の事情もありて、一直線の暴騰は容易に望み得られざるを以て

高値は利喰し、押目は更らに買直ほすの方針を取るべし。而して其天井底値の如きは大体に於て既に道人の腹案はあれども、併し種々の事情に依て折り／＼變化するをあれば、一ヶ月も前に在て本書に的確に公表するとは之を避くべし。此下旬より来る十二月は頗る波瀾に富みて、激變あり、ウマク遣れば買つても賣つても、儲かる時期なり。其詳細機敏の駆引は本社特別電報部の任なり。

次 三  
虎 錄

次號三虎錄は一層記事を精選し十二月二十二日  
より來年一月三十一日迄の期米高低變動毎日高  
低等を豫言詳斷す十二月廿日發行、價壹圓

後 篇 毎 日 高 低

前途の毎日高低に就き、以下に述ぶる處は既往百八十年間の實驗に成れる秘卷を私かに手に入れたれば即ち之れに基きて判斷を下したるものなり。夫れ相場

は時々刻々に變化す。朝に暴騰の兆を認むと雖も、夕は一變して俄かに暴落の兆現はるとあり。容易に端倪捕捉すべからざるものは是れ相場の特徴とす。而かも數十日前に在て未來の高低を的確に豫言して誤まるをなきは至難の事たり。從て以下に述ぶる高低表は之を未來毎日に施して必ずしも百發百中と云ふに非らず、唯だ既往百八十年間の曆數的實驗の上より觀て相場變動の大法は斯くあるべきまものと云ふなり、蓋し十中の八九は的中せん。

此曆數的實驗上より觀ても、強弱材料の比較より觀ても、九眼天玄法より觀ても、齊しく相場變動の兆候一致する時は必ず相場は本社の豫言通りに動くものとす。故に本書の讀者は本社の特別電報部に加入し居らるゝを安全とす。

十一月廿四日(月曜)

此日は買に利あり

十一月廿五日(火曜)

相場が崩るゝやうに見へても安値にハタと止まる時は、買方心掛くべし。一旦

上ぼるも若し三日の内に再び崩れて此日の安値を抜くやうのとあるも、开は却つて相場が底調べに来るものなれば慌て、其安値に投げ退くべからず。安値は却つて底になり、再び上ぼる事あり。

●十一月廿六日(水曜)

段々下りて安き時は底になりと留まる事あり、然れ共若し前日の安値にて保合ふ時は下るなり。

●十一月廿七日(木曜)

此日は相場の分岐日として大切なり若し段々に上ぼり来れば當分天井になるとあり又下りて安値底になる時は日數掛るも大上がりになるもあり然れども此法よりも此日は左の方法を取るべし

其方法は先づ此日の前場第一節の寄付値段と廿五日(十一月廿五日なり)の前場第一節の寄付値段とを合計して之を二分し其中値を見定むべし而して此日の相場が右の中値より一二錢たりとも上越せば上岐れと心得て買方心掛くべし若し

之れに反して右の中値を僅かにても下越さば相場は前途下放れと心得て賣方心掛くべし即ち歸する處は此日の相場は足に従へと云ふとにあるなり例へば一昨日廿五日の前場第一節の先限寄付値段が十九圓四十錢にして本日の廿七日前場第一節の先限寄付値段が十九圓四十錢なりとする時は之を合計して二分すれば十九圓三十五錢となる而して此廿七日中の相場を見て若し中値なる三十五錢を下へ破りて三十四錢三錢二錢と行く時は中値尙ほ下落すべきものと心得べし若し中値なる三十五錢を破らずして益す強硬の歩調を取る時は前途尙ほ騰貴すべきものと心得て買方すべし若し相場は強硬の歩調なるも後場に入て俄かに様變はりとなり中値の三十五錢を下へ抜くとあれば勿論前途下落なり反之相場は軟弱にして三十五錢の下位に在りしが後場俄然上向きとなりたる時は前途高しと知るべし故に此日は相場の成行きを一日見定めたる上にて玉は後場の二三節過ぎに仕掛くるを可とす

●十一月廿八日(金曜)

此日上ぼるとも又た明日下りて又戻るものとす

●十一月廿九日(土曜)

上る時は賣るべし目先き天井になるとあり之に反して下なる時は底にになるとあり即ち此日は相場の足に従はずして寧ろ相場に逆ふを可とす

●十一月三十日(日曜)

●十二月一日(月曜)

前場第一節の寄付へ戻りて下へ打込むとあれば買ふべし

●十二月二日(火曜)

押目くを買ふべし

●十二月三日(水曜)

此日は分岐日なり高値に行問へれば當分天井、安値に行問へれば當分底になるの日なり。然れども此日は此方法よりも左の方法を取るべし

其法は先づ一昨發會日の前場第一節の寄付値段と此日の前場第一節の寄付値

段とを合計して之れを二分し其中値を取るべし而して此日の相場が其中値を上へ越せば前途高し之れに反して下へ越せば前途安きものと知るべし即ち相場の足に従ふなり

●十二月四日(木曜)

此日は變あり何でも測り難し

●十二月五日(金曜)

一昨三日前場第一節の寄附値段と此日の前場第一節の寄附値段とを合計して之を二分し其中値を見定むべし而して此日の相場が其中値を上越せば上岐れとし若し下越せば下岐れとす

●十二月六日(土曜)

此日安値留まる時は買立すべし又突飛高は賣て二日の内に利あるべし利あれば喰退くべし

●十二月七日(日曜)

●十二月八日(月曜)

此日は買方心掛くべし

●十二月九日(火曜)

此日は相場の岐れ目として大切なり、此日前場第一節の寄付より下なきは買に利あり。寄付より上ぼりて夫れより下がるゝあり。段々下地上ぼりて此日も上ほれば其高値を見て賣るべし。但し本月五日六日の兩日安き時は此日高し大上がりあり

●十二月十日(水曜)

此日寄付より下なきは買に利あり、寄付より直ぐに押すも下にて買廻はし吉、寄付保合ひて上なきは下るなり

●十二月十一日(木曜)

寄付より上なきは賣廻はし吉、然れども下にて買建つべし寄付揃りに戻るものなり

寄付前日より高く出る時は押して上ぼるものなれば買建つべし

●十二月十二日(金曜)

此日安ければ當分底になる大上かりの小口になるゝあり

●十二月十三日(土曜)

段々高くなる時は目先き天井になるゝあり

●十二月十四日(日曜)

●十二月十五日(月曜)

此日高き日なり、安ければ翌日高し若し高く保合ふ時は數日中に大下りあるものとす。又た他の一法は此日の前場第一節寄付値段と一昨十三日の前場第一節寄付値段とを合計して二分し其中値を見定め、若し中値を上越せば上岐れ下越せば下岐れと知るべし

●十二月十六日(火曜)

此日大下がりなる者なり若し此日下落せざる時は十九日迄に下がる



●十二月十七日(水曜)

此日は安き日なり前日の安直より下へ廻らば大下りに成るべし

●十二月十八日(木曜)

此日より上る時は四五日の内に當分の天井を打つべし尙ほ此日高ければ翌日大下がりあるものとす

●十二月十九日(金曜)

本月十六日の日大下がりあれば此日も下がる但し安値は底を打つとあり

●十二月廿日(土曜)

朝場は下げんとして下げず寧ろ上ほる勢に在れど大引は安し併し跡は心得べきに依り大引安ければ利の乗れる玉は買埋むべし

●十二月廿一日(日曜)

●十二月廿二日(月曜)

此日安きもの也若し過ぐる十五日安き時は此日高し前日下りなば此日も下る也

●十二月廿三日(火曜)

段々安き時は底になりて大上り口になるものなり

他の一方は此日前場第一節の寄附値段と一昨廿一日の前場第一節寄附値段とを合計して二分し中値を見定め若し此日の相場が其中値を上越せば上岐れ下越せば下岐れと知るべし

●十二月廿四日(水曜)

此日變ありて高下するものなり上下共大相場成るべし餘り高き時は當分の天井にもなるべし

●十二月廿五日(木曜)

寄附より上なきは下がるなり上ほるとも大引は安しと知るべし尤も左のみ動かぬ日なり

●十二月廿六日(金曜)

此日寄附より下る時は押目を買ふべし押しても再び寄附搦みへ戻るものなり

### ●急電社規則摘要

一、本社は東京取引所の期米株式相場に就て其前途の高低變動を豫測して之を會員に豫報するを以て趣旨とす

一、會員として本社の豫言豫報に接せんとする者は左の通信料を必ず前納せらるべし

(甲)書簡通信 三十日間金參圓、十五日間は謝絶す

(乙)特別電報 三十日間金十五圓、十五日間金十圓、賣買取引に就て一々電報を以て急報し尙ほ時々書簡通信を發すべし打電先が朝鮮臺灣なる時は其料金は三十日間金十八圓十五日間金十一圓にして書簡通信は畧す

(丙)最特別電報 三十日間金三十圓、十五日間金二十圓、最急の場合はウナ電報を用ゐ且つ會員より本社に對する照會は一ヶ月五回迄は返電料の添付を要せず頻々たる電報を以て極めて機敏極めて懇切に通信し尙ほ時々書簡通信を發すべし打電先が朝鮮臺灣なる時は其料金は三十日間金三十三圓、十五日間二十一圓とし書簡通信は之を畧す

(丁) 試報 指導一回限り金二圓

●本社の會員には其入會日の以後に於て發する書籍ある時は電報部の會員たる書簡通信部の會員たるを問はず總べて之を無料進呈す

●書簡通信の受信者が中途にして特別電報部に轉ぜんとする時は新に特別電報部の料金卅日間十五圓又は十五日間金十圓を前納するを要す但し此場合に於ては前に本社が受取りたる書簡通信部の料金は日割を以て計算し殘餘は返還す從つて中途轉部者は特別電報部の料金たる十五圓中より本社が返却すべき書簡通信の殘料金を差引き御郵送あるも可なり

●最特別電報部の會員より本社に對する照會電報には一ヶ月五回迄は返電料を添付せずも本社に返電す特別電報部の會員より本社に對する照會電報には總べて返電料を添付したる時に限りて返電す若し本社の返電が後れたる時は本社の方針は前電と同一なるものと推察ありたし

●書簡通信の受信者は返電料を添付し來ると雖も本社は電報返事を爲さざるものとす併かし本社は常に會員の爲めに銳意専心相場の觀測に従事しつゝありて決して報導を怠らざるものなれば決して態々電報照會の如き御心配に及ばざるものとす

●本社には信託部の設備あり即ち相場資金として三百圓以上を提供せらるゝ時は本社は本人に成代はりて自ら相場に従事し利殖を圖るの便法あり詳細は御照會あれ

●本社に對する至急送金は電報爲替を要す然れども其電報爲替と同時に別に念の爲め端書を以て期米株式の種類住所姓名等を詳報せらるべし

### ●急電社の成績

- 一、九眼道人が急電社を起して相場場の豫言通信を開始したるは昨年春のとなりき當時期米の相場は十八九圓なりき其會員に對する目先きの小相場に就ては「朝令暮改茲に一々掲載の除白なきを以て之を畧さんも大方針として極力買主義を取りたり果せる哉昨年六月末より七月に及び大暴騰廿三圓六十錢臺に沸出せり
- 一、於是七月發會(昨年)の二十三圓六十錢臺よりドデン賣方針と化し十六圓臺迄賣方針を一貫せり當時毎夕新聞紙上に迄數回公表して極力賣方針を執りたる事は今尙ほ人の記憶に新なるべし果然相場は十六圓三十七錢迄暴落せり
- 一、復たドデン買方針を取りたる處暴騰に暴騰を重ね本年一月には廿三圓十六錢の高値を出すに至る
- 一、於是道人は道人獨特の秘法に照らして暴落の兆を發見せるのみならず政府の機密筋に就て廿三圓臺の米價は政府が極力調節下落の政策を執るべきを陰かに窺知して爾後戻り賣り

方針を一貫して本夏に及びたる處遂に此夏八月に及び當限は十六圓六十錢先限は十七圓飛臺に暴落せり道人が本年六月五日發行の「米界の秘密」なる書中にも期米が十六圓七八十錢あるべきを豫言したるは同書の讀者の熟知せらるゝ處なり

- 一、本年八月六日期米の當限十六圓六十錢先限十七圓飛臺に暴落するや數百丁の總利喰と同時二期米底入りと斷言してドデン買方針を取れり但目先きの小揃ひを取らんが爲め時に賣電報を發して會員に聊か苦戦を與へたることあれども道人の根本大方針は強氣なるを以て間もなくドデン買方針を取りたる處相場は道人の言ふ通り暴騰して遂に十月下期に及び二十圓七十錢の高値を出せり

- 一、於是道人は復たもドデン賣方針を取りたる處相場は急轉直下の勢を以て暴落せり
- 一、道人の爛々たる眼光は能く大勢の微妙を達觀し其靈妙なる頭腦は高低變動を豫斷するも快刀の亂麻を斷つが如く其道人獨特の九眼天支自在法は實に幽妙深遠なる幾多の理法を含みて相場豫測の母たり三虎録の讀者は必ず本社の特電報部に入會せられよ

### ●豫言通信社の選擇

- 一、本社の主幹たる九眼道人が其前途の相場を斷ずるには道人獨特の秘法たる天支法を應用

し且つ参考として強弱の諸材料を調査す  
 二、世間には千里眼や感應力や神佛祈禱等を以て相場を豫言せんとする者あれども是れ誤まりり看よく彼等の豫言は常に不的中のみなり、相場は逆も人間の淺薄なる感應力や自稱千里眼の類を以て豫測する能はざるものなり、九眼道人は彼等不都合なる豫言家の流行して人を誤まるを慨し乃ち急電社を起して通信業を開始し大に投機界諸氏の爲めに盡す處あらんとするなり

一、而して素人は兎角通信料を惜むの念あれ共是れ非なり見よ彼の大手筋黒人筋と雖も二三の通信社には必ず加入し居る有様なり、大手筋黒人筋の如きは倦まず撓まず毎月能く通信社に加入し居れり、黒人筋の如きは相場師は必ず通信社に加入せざるべからざるものと爲し居れるなり、去れば黒人筋の如きは大阪より早耳電話を取るにすら月に五十圓百圓位づゝの通信料を費し彼處此處の通信料を合する時は一ヶ月の通信料金は巨額なるべし然れ共未だ嘗て通信社に加入を廢せず、現に本社の會員中にも大手筋黒人筋も少なからず本社が一電を發する時は大手筋と雖も或は買ひ或は賣りに廻はる事あり、相場は逆も素人の片見込を以て大勝を博し得べきものに非らず、是非共通信社に加入せざるべからず要するに連月本社に加入し居らるゝ時は結局多大の利益を得て勝利軍となり得べきを信ず、通信料

の如きは非常に安きものなり

● 無料打電に就て御心得

本書を本月三十日迄の間に本社より直接御購讀の士に對して、本社は一回限り打電料は本社の負擔を以て無料打電すべし乍併相場は刻々に變化し、從て本社の方針も時々變化するもあり、故に本社の一回丈の無料打電に據て御仕掛けに相成りたる玉が多少にても利乗りたる場は勿論若し利乗らざる場合に於ても御入會あるを御得策とす

期米三虎録終

275  
548

大正貳年十一月十九日印  
大正貳年十一月廿二日發  
行 刷

(定價壹圓)

著 者 九 眼 道 人

發行者 中 村 重 造

印刷人 岡 津 磯 二 一 三

東京市日本橋區蠅殼町二丁目二番地

印刷所 大勢新聞社印刷部

發行所 東京市下谷區二長町參番地 急電社

終

